産経新聞
平成26年(2014)日刊25579号
3|3[月]
産業経済新聞(サンケイ)
THE SANKEI SHIMBUN
発行所 ©産業経済新聞東京本社2014
〒100－8077東京都千代田区大手町1-7-2
☎東京(03)3231-7111(大代表)

名取市民の森、大切に守る

海岸林再生プロジェクト

槌音

仙台空港を間近にのぞむ宮城県名取市下増田。約6千平方㍍の畑に、高さ約20㌢のマツの苗木が並ぶ。種を植えてから今月で2年。成木になるまで、まだ30年はかかる。

小さなマツの苗木に託された使命は大きい。育った苗木は5月、同市の沿岸部約1000㌶に移植され、東日本大震災で壊滅した海岸林として育てられる。

「この畑で、10年間で50万本の苗木を育てます」。海岸林再生プロジェクトの現場を統括する林業技師の佐々木広一さん(63)が、説明してくれた。「乾いた寒風の吹く名取市の沿岸は、木には過酷な環境。多くが枯れることも予想されるので、気が抜けません」と、顔を引き締めた。

× ×

林野庁によると、震災では青森から千葉までの海岸林は約3660㌶が倒木や浸水などの被害を受けた。そのうち約1753㌶が宮城県内だった。

世界各地で緑化活動を展開する公益財団法人「オイスカ」(東京)の吉田俊通さん(44)は震災から2日後、津波で壊滅した海岸林の再生に動き出した。平成23年5月には、名取市を現地視察した。成長に長い年月を要する木は、少しでも早く植えたほうがいいからだ。

同市の海岸林のほとんどはクロマツだった。水を求めて地下3㍍の深さまで根を縦横に張るため、倒れにくい。

「あれだけ深く根を張るクロマツが、なぜこんなに簡単になぎ倒されたのか」。現地調査の結果、海岸林の場所は地下水が高い位置にあり、根は地下1㍍の深さまでしか張っていなかったことや、密集していたため横にも広がっていなかったことが分かった。

「土地を2、3㍍かさ上げした上で幅をもたせて植林すれば、頑丈な海岸林を再生できる」。そう確信した吉田さんは住民らの協力を求め、避難所の中学校を訪れた。

「海岸林を再生したいんです」。約30人の被災者にそう説明したが、賛同者はわずか3人。そのうちの一人で現在「名取市海岸林再生の会」の会長を務める鈴木英二さん(72)は当時を振り返る。「悪夢のような出来事が起き、日々の生活で途方に暮れていた最中だったからね」。だが、鈴木さんには特別な思いがあった。津波で周囲の家屋が流される中、鈴木さんの自宅だけが海岸林のおかげで無事だったからだ。「海岸林の再生に手を貸そう」。鈴木さんのかけ声に応じる住民は次第に増えていった。

鈴木会長らは育苗の講座を受け、同年11月に資格を取得。現在34人の被災農家らがマツの苗を育成し、収入を得ている。鈴木会長は「東京五輪までに植栽を終え、名取市民の森として大切に守っていきたい」と、被災地の将来を思い描く。

× ×

宮城県の海岸林の歴史は約400年前にさかのぼる。江戸時代、仙台藩主の伊達政宗は農業振興のため、石巻市渡波から山元町磯町までの沿岸部約65㌔に海岸林の造成を命じたとされる。海岸林は、「やませ」と呼ばれる冷たい潮風を防ぎ、冷害から農家を守ってきた。名取市の海岸林は明治時代に森林伐採が進み、戦中に荒廃したが、戦後に住民らの植林で再生したという。

同市広浦の葦が覆い茂る草原には、戦後、海岸林の再生に尽力した人の名前が記された「愛林碑」が建つ。「名取市海岸林再生の会」メンバーの祖父の名前も記されている。

吉田さんは「再生には何十年もの月日がかかるが、孫の代やその先に立派な海岸林を残したいという気持ちで取り組んでいる」と話す。将来の市民を守る森づくりの計画は、始まったばかりだ。

(安藤歩美、写真も)

順調に育つ海岸林の苗木の育成状況を説明する海岸林再生プロジェクト現場統括の佐々木広一さん　―宮城県名取市

平成２６年(2014年)２月２８日(金曜日)　©河北新報社 2014(日刊)
河北新報
2月28日(金)
河北新報社

海岸林復活へ一歩

名取市沿岸部で行われている「海岸林再生プロジェクト」の第1回定期活動報告会が22日、同市文化会館で開かれた。東日本大震災で失われた海岸林の復活に向けて、今春から毎年10万本規模でクロマツなどの苗木を植樹していく計画が示された。

名取「再生プロジェクト」計画発表

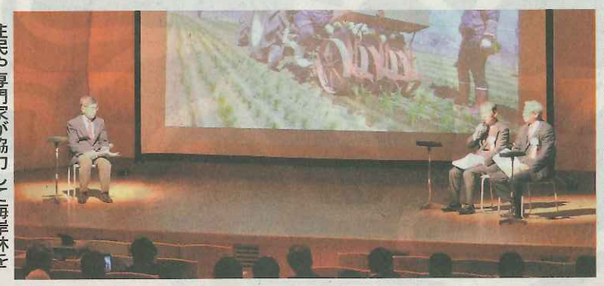
春から苗木10万本植樹

公益財団法人「オイスカ」(東京)と、地元農家でつくる「名取市海岸林再生の会」の主催。両者は協力して10年間でクロマツを中心とする苗木を50万本(100㌶分)以上育て、海岸に植えるプロジェクトを進めている。

この日はこれまでの経緯と育苗の成果などの紹介があった。13日には市内の県有林と市有林計約90㌶の植林について、県・市と協定を締結したことが報告された。

基調講演した太田猛彦東大名誉教授は、飛砂や強風などを防ぐ海岸林の多くが17世紀以降に植えられた人工林であることなどを説明し、「地元住民らが苗木を育てるところから再生を目指す試みは素晴らしい」とプロジェクトを評価した。

28日には市内の国有林2・9㌶の植林について国と協定を結ぶ予定。オイスカ啓発普及部の吉田俊通課長は「海岸林を育てるのは非常に難しい作業。50～100年後の将来を考え、長い目で取り組んでいく」と語った。



住民や専門家が協力して海岸林を再生していく方針が説明された報告会

海岸林再生

名取の北釜に白砂青松を取り戻す

東日本大震災の津波によって、東北地方太平洋沿岸部の海岸林は大きな被害を受けた。青森、岩手、宮城、福島、茨城、千葉の6県の海岸林の浸水被害は約3660㌶に及び、中でも宮城県は浸水面積が約1750㌶と飛び抜けている。

海岸林とは、飛砂や塩害、強風や高潮から田畑や家屋を守るために、仙台平野では伊達政宗公の時代から組織的に造成されてきた。現在、仙台空港近くの名取市北釜地区も耕地を作るために、湿地帯や原野を開墾し、海からの飛砂や塩害を防ぐ目的でクロマツが植林された。その後、地元の人たちが海岸林を守ってきた。日本の海では白砂に松林が一つの典型的な風景としてあるが、その多くは農地や家屋を守る実利的な目的があって植林されたものだ。普段はあまり意識されない松林だが、大きな効果が実証されている。だが、今回の津波では岩手県陸前高田市の高田松原のように、壊滅してしまった所も多い。今回の津波で海岸林が流された原因は、地下水面が高いため、根が垂直に下がらず、地下水に触れないように、水平に根がはり、倒れ易くなってしまったと分析されている。北釜地区でも、数㍍の高さがある丘状地のクロマツは津波に耐えて残っており、今後の植栽では、3㍍盛り土した上に植栽する計画だ。同地区では震災前、70㌶の農地でチンゲンサイを生産し、年2億円の売り上げがあったが、津波で浸水。海岸沿いの幅約200㍍あった海岸林も壊滅的被害を受け、現在はまばらに残っているのみだ。

鈴木英二代表。背景はまばらに残った海岸林

海岸林を地元の手で

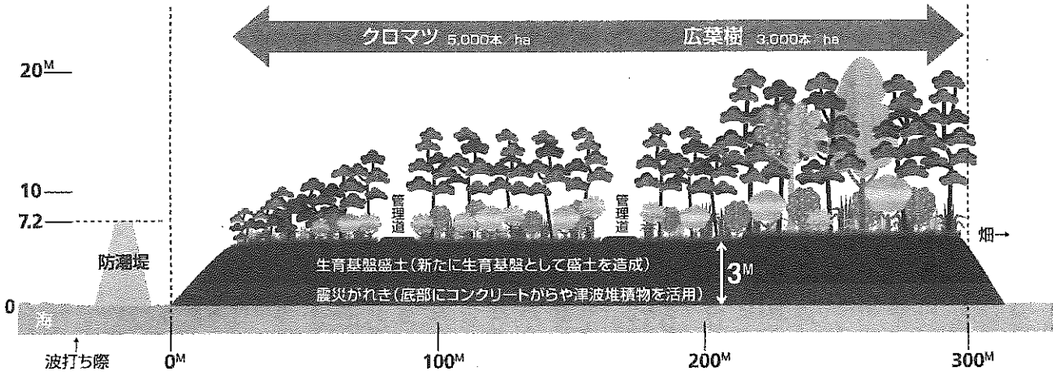
震災後、いち早く公益財団法人オイスカ（東京都）が海岸林の再生を計画。ツテがあった北釜の人たちに11年5月に説明会を実施したところ、賛同者が集まり地元の農家の人たちが中心となる「海岸林再生プロジェクト」が立ち上がった。同プロジェクトは名取市北釜地区から閖上浜の約5キロ㍍、約100㌶を対象地とし、クロマツの苗木を10年間で50万本植林する。資金規模は10億円で、全国からの寄付で賄う。同プロジェクトはオイスカが全面的にサポートしている。震災で自宅の確保や農業の継続など先行きの見えない中で、25人が海岸林再生プロジェクトに賛同。12年2月に「名取市海岸林再生の会」（以下、再生の会）が発足した。

同会代表の鈴木英二氏は「津波で何もかも流されて、自分たちの生活がどうなるか分からない状況でしたが、オイスカの人たちが海岸林再生の話をされて、地元民20人以上が賛同して始まりました。ここで農業を続けるには、海岸林が必要でした」と語る。

オイスカ啓発普及部課長で海岸林再生プロジェクト担当の吉田俊通氏は「このプロジェクトは地元の人たちの活力が必要です。公共事業では地元の人たちが参画できませんが、オイスカと一緒に取り組むことで、地元の人たちも参画できます。被災農家の雇用も生まれます」と語る。海外での農村開発の経験が豊富なオイスカならではの地元民を巻き込んだ方法で、プロジェクトがスタートした。

クロマツの苗を床替え作業中の守る会のメンバー（オイスカ提供）

海岸林再生の将来イメージ（名取市）



種から育て、雇用に貢献

海岸林再生プロジェクトでは、クロマツの種を発芽させ、苗木を育成し海岸の約3㍍盛り土された用地に植林する。これらの作業に名取市海岸林再生の会のメンバーが主体的に参加。必要に応じて、種苗組合や森林組合、ボランティアなどの協力を仰ぐ。現在メンバーは33人で、全て被災した地元の農家だ。12年は224人、13年は約1000人分（延べ。1日8時間労働換算）の雇用を生んだ。

クロマツは春に播種し、発芽した苗を間隔が広くなるように床替えを行い、25～45㌢㍍に成長した3年目の苗が植林される。会のメンバーは育苗や床替え、植林、下刈、除伐などの作業を行うが、フルタイムで働くわけではなく、その時々の仕事を自身の農作業との兼ね合いで参加でき、副収入を得られる。自分たちの地域を守る、海岸林作りに自ら参加し、なおかつ収入も得られる点が、このプロジェクトの優れた点だ。資金の10億円も、オイスカのネットワークを生かして募金で賄う。大企業の寄付も多いが、「件数では個人の寄付が圧倒的に多い」とオイスカの吉田課長は語る。中でも、宮城県内からの寄付が多いそうだ。これまでの寄付総額は約3億円で、年に1億円のペースで集まっている。

もう一度野菜を作る

だが、クロマツを育てるのは簡単ではない。種苗法があり、誰もが自由に種子を入手し育てることはできない。再生の会では、代表して3人が種苗組合員となり、種子を入手する道筋をつけた。また、植林に際しては森林組合の協力を得る。種子の発芽は94％と非常に高い成績を達成したが、草取りや水やり、害虫駆除など人手のかかる作業が多く、床替えなどを行い、最終的に樹木として育つのは半分程度と言われている。クロマツは10年で高さ1・5㍍程度に育ち、飛砂を止める効果を発揮、30年で閖伐する。ただ、海沿いの養分の少ない厳しい環境であるため、枯れる木も多いという。再生の会の鈴木代表は「ここでもう一度野菜を作りたいという思いで皆頑張ってます」と語る。

こういった、地元民が参画しての海岸林の再生はまれなケースで、多くは公共工事として国や県が主体で植栽を行う。「地元では、国がやってくれるのだからまかせておけば良い、という声もありましたが、自分たちでやることが大事なのです。このプロジェクトはたくさんの方々からの寄付で成り立っています。その思いも大事にしていきたい」と鈴木代表は訴える。

将軍の日　1日集中／実践型
経営者・後継者のための
中期5カ年計画立案セミナー
意思決定ができます！ 攻め・守りの決断をサポートします！
平成26年「将軍の日」実施予定日
第66回 4月19日（土） 第67回 6月21日（土）
第68回 7月19日（土） 第69回 9月20日（土）
第70回10月18日（土） 第71回11月15日（土）
会社の命運を決める！
◆開催日時 上記よりご希望の日をお選び下さい。 10時00分～18時00分
◆会　　場 千葉経営企画㈱ 2階 会議室
◆参 加 費 一社 30,000円（税抜き）
※全国標準価格は1社50,000円（税抜き）ですが、弊社で「将軍の日」を実施された企業様に限り特別優遇価格1社30,000円（税抜き）です。全国標準価格とは…当社が会員となっている「あんしん経営をサポートする会」が全国で実施している「将軍の日」の実施価格です。
当社では、1日で納得のいく経営計画書が作成できるよう、当社担当者が事前準備の為ご訪問いたします。お気軽にご相談下さい。
詳しくはWebで!!! 千葉経営企画 クリック
〈お問い合わせ・お申込みは〉千葉経営企画㈱ 担当 今野・野窪
〒985-0042 宮城県塩釜市玉川1-2-40
TEL022-365-2823 FAX022-366-3882
http://www.chiba-kaikei.co.jp/ E-mail:chiba-kaikei@tkcnf.or.jp